



亀中だより

No. 16 令和8年7月7日 文責 岡田



For The Students!

第44回全国中学生人権作文コンテスト 三重県大会入賞作文より

今年で45回を数える「全国中学生人権作文コンテスト」ですが、亀山中学校でも毎年この取組に参加してきました。第44回であった昨年は三重県内からも150校が参加し、33,276編の作文が寄せられたそうです。今年もすでに3年生では授業内で取り組んでいます。1,2年生にも夏休みの課題の一つとして募集させていただきます。学校での人権学習だけでなく、自分自身の体験、日常にある思いなどをこの機会に作文にしてみてください。

さて今回は、昨年のコンテストで三重県大会最優秀賞の一つであり、三重県教育委員会教育長賞を受賞された津市立東橋内中学校3年のメディア アリアナさんの作品をご紹介します。作品のタイトルは「私に巡る多様性の証」です。亀山中学校が多文化共生に力を注いでいることは何度もお伝えしてきましたし、生徒のみなさんは日々の生活の中で、自らの生き方として考えてくれてきたことと思います。アリアナさんの思い、彼女を救った友人の一言などには共感する部分も多いでしょう。現在を、そして将来をどのように生きていくかを考えるときに参考とすべき内容です。生徒のみなさん、保護者のみなさん、ぜひご一読ください。

「私に巡る多様性の証」

津市立東橋内中学校3年 メディア アリアナさん

「他の国で生まれたから、この国から出ていけ。」

私は日本に住んでいてはいけないのでしょうか。こんな言葉を投げかけられた時、胸が締めつけられました。私はフィリピンで生まれ、小さいころに日本へ来ました。好きで来たのではなく、日本で一生懸命働く父と母と共に生きるために、この国に来たのです。

両親が日本で働くには条件があります。誰でも来られるわけではなく、私たちもその条件の中で暮らしています。だからこそ私は義務教育を受け、日本語も少しずつ話せるようになり、読み書きもできるようになってきました。気づけば日本語で夢を見ることもあるほど、生活は日本に根づいています。

私のルーツには日本もあります。高祖父母のどちらかが日本人で、その血を少しだけ受け継いでいます。そのことを理由に、両親は日本で働くことを許され、私はこの国で学び、育っています。しかし、その日本のルーツをかえってからかわれることがありました。「日本の血があるのに、どうして日本語が下手なの？」と責められる。外国人の子には、「おまえは日本人だろ、あっち行け。」と言われる。心にナイフを突き立てられたようでした。

以前通っていた学校では、外国にルーツを持つ子はほとんどいませんでした。私は孤独でした。名前をからかわれることもありました。「アリアナ」という名前が、人気歌手と同じだからと笑われる。でも私はその人ではない。私自身を見て、私の名前を呼んでほしいと強く願いました。学校へ行くのが怖くなり、机に一人座っては「なぜ私はこんなふうにも生まれたんだろう」と自分を責め続けました。フィリピンに行けば「日本へ帰れ」と言われ、日本では「フィリピンに帰れ」と言われる。では私は一体どこに帰ればいいのか。

そんな時、友だちの一言が私を救いました。「何で自分を嫌いになるの？アリアナはアリアナじゃん。」その言葉に涙が出ました。自分を否定していた心に、やさしい光が差し込んできたのです。私は初めて「自分のことを好きになってもいい」と思えました。

私は黒い髪も黒い目も持っています。日本人のようにも見えるし、英語やタガログ語、ビサヤ語も話せます。私の中には日本とフィリピン、両方の血が流れています。私は「一人で多様性を体現している存在」なのだと気づきました。

これまで「血」を理由にからかわれたり傷つけられたりしました。でも考え方を変えれば、それは「多様性の証」です。一本の物差しで測れば「日本の血があるのに日本語が下手」と見なされる。でも多様な物差しで測れば、「日本とフィリピン、両方の文化を持っている。すごいね」と言えるはず。私はその「物差し」を増やしていきたい。そうすれば、国籍や文化の違いに苦しんでいる人に「あなたはそのまま素晴らしい」と伝えることができます。

私は、高校生になったら漢字などの基礎的な学力をもっと身に付けて、将来就職したい会社があります。その会社では、様々な国の人働いています。世界中の人と出会い、さまざまな文化を体に取り入れたいのです。もちろん「血」までは変えられません。でも、心の中に多くの文化を取り込み、たくさんの価値観を持つことはできます。私の体の中を巡っている、この「多様性の証」を誇りにし、いじめにあっている人や国籍で悩んでいる人の声を聴いてあげられる、そんな人間になりたいです。

思えば、あの時私を救ったのも「一言の言葉」でした。「アリアナはアリアナじゃん」という何気ない言葉が、私の心を溶かしました。だから私も、誰かの心を照らす言葉を届けられる人間になりたいです。

人は生まれた国や肌の色で差別されるべきではありません。「日本人だから」「フィリピン人だから」「黒人だから」……そんな言葉は、人を分け隔てる刃にしかありません。みんな同じ人間です。違いは「劣っていること」ではなく「豊かさ」なのだと、私は自分の体験を通して知りました。

どうか、あなたも思い出してください。あなたの隣にいる人が、国籍や文化の違いで悩んでいるかもしれません。からかうのではなく、「そのままがいい」と認めてあげてください。その優しさが、誰かの生きる力になります。

私はもう、「この国から出ていけ」という言葉に負けません。なぜなら私は、この国で生きることを選び、ここで多様性を誇りにして生きていくと決めたからです。自分を嫌いだったあの日の私に伝えたい。「生まれてきてよかった」と胸を張って言える未来は、必ずあるのだと。

私の小さな一歩が、やがて社会を変える大きな力になることを信じています。

メディア アリアナさんの作文に対してみなさんはどのような感想を持ちましたか。メディア アリアナさんは、「私の小さな一歩が、やがて社会を変える大きな力になることを信じています。」という言葉で締めくくっています。彼女の“小さな一歩”が“社会を変える大きな力”になるには何が必要なのでしょうか。

昨年、今年と相次いで亀山中学校で、そして亀山市内で、外国人差別となる発言がありました。言葉の意味も十分に理解していないことに加えて、いわれた人も、それ以外の人も傷つけてしまう発言でしたが、発言した人はしっかりと振り返りをしてこれからの自分についても考えを深めてくれました。ただ、私たちは今後、差別される人も、差別をしてしまう人も、差別を見逃ごしてしまう人も作りたくはありません。全学年で行った「人権アンケート」では、差別がいけないことは理解していても、差別がなくなるために「自分はどうしたらいいかわからない」という声が多くなっています。でも難しく考える必要はありません。「あれ、おかしいぞ」「それっていいのかな」と思ったときに、そのまま放置することなく、「これっていいのかなあ」と友達や先生に話したり、「大丈夫？」と声をかけたりすることが始まりです。

そんなあなたの小さな一歩を集めていくことが、アリアナさんのいう“社会を変える大きな力”になるはず。私たちも人権学習で自分の物差しを増やしていきながら、人権感覚を身につけ、「そのままがいい」と認め合える関係づくりをすすめていきたいと思えます。差別に対して自分にできることを考え、行動できる。そんな亀中生になってほしいと思えます。